672
369

人格と實行

下田次郎著

0041764000

0041764-000

672－369

人格と実行

下田次郎・著

東京開成館

昭１１

AHB

672
369

禁書

672
369

人格と實行

文學博士 下田次郎述

納本

672
369

人格と實行

文學博士　下田次郎述

一

人格といふものは何か――いろいろいひ方もあらうが、とにかく生れつきと生活と教養とから出來上つた、渾然たる精神力の源泉とでもいつたらよからう。

この人格といふものは天地間の寶であつて、非常に尊貴なものである。いろいろ生物もあるが、人格の出來上つた人以上の偉いものは地上にはあるまい。もし星の世界に、本當の世界大博覽會が開かれた時に、地球が何を出品するかといへば、人格の出來た人を出品する以上の出品物はあるまい。

人格は何から成立つてゐるか――これはなかなかむづかしい問題であらうが、ただ知識技能を持つてゐるから人格者といふわけにはゆかない。これは人格を作る要素或は養分になるのであるが、人格として大切なのは知識技能の方面よりも、寧ろ情操、意志の方面である。どんなに學問があつても、技術に秀でて居つても、人格に缺陷があれば、人の風上にはおけないのである。

倫理學や心理學は、人格を分析して、微を穿ち細を極めて、特に今日の倫理學の如きは、非常に細かいことを人格についていつてゐるが、しかしそれはただ機械的に分析しただけのもので、人格とい

ふものは、到底分析の出來るものではない。薩摩汁はいろいろなものを煮出して、やたら煮といつて汁が出來るが、人格といふものは人の生れつき、教養、生活の煮汁のエッセンスみたやうなものであつて、ごつた煮のいいところが煮上げられて殘つたエキス、これが人格といふやうなもので、分析によつて人格を見究めようなどといふことは、到底出來るものではない。

年毎に咲くや吉野の山櫻木を割りて見よ花のありかを

といふ歌がある。櫻の木をぶち切つて、どこに花の形があるか、花の色、匂ひがあるかと見ても、そこには何もない。それは十分に育つた曉に吉野の櫻花ともなるのであつて、木を切つて分析して花を見ようといふことは、つまり出來ないことで、人格も櫻の花も、分析の表には現はれて來ないのである。富士山は眺めるべきものであつて、說くべきものでない。どんなに富士山について說いても、本當の富士山は見なければわかるものでない。人格は說くべきものでなしに、接すべきもの、眺めるべきもの、直面すべきものである。

人格こそは不思議なものであり、奧の知れない、靈といふか、精神力といふか、それがその源泉となるところのものである。繪には氣韻生動といふことをいつて、特に南畫あたりでは、眞の良いものにはそこに一種の精氣があつて、僞物と本物はその迸るところの精氣によつて、畫面一尺ほど開けば直ぐ判る。日本刀にしても、鍔から五寸ぐらゐ拔けば、本當の名刀には一つの精氣が迸つてゐるのであるが、人格にもやはり精氣、正氣または靈氣の發動があり、氣韻の生動するものがある。物理では、ラヂウムのエマネーション(放出)といふことをいつて、ラヂウムは一種の力を放出して、いろいろな作用をするといふが、人格もやはり精神的ラヂウムみたやうなものであつて、常にそこから精氣を放出して、それにあたるものを何かに化さずにはおかないのである。佛像にはよく背光といふものがあつて、後に光の射したものを背負つて居られる佛像がある。これは佛の德や力を形容したものであつて、その佛體から有難い靈氣が放出してゐることを意味するのであらうと思ふが、人間にもやはり各〻の人に精神的後光といふものが射してゐるのであつて、常に自分から四方にそれを放出してゐるのである。だから、人格者はものをいはないでも、ただそこにゐるだけでも、ミーア・プレセンスでも、非常な働をするものである。團十郎はただ舞臺に坐つて居りさへすれば芝居になつた。動かないでも、喋らないでも、團十郎が出てゐるといふことが舞臺を重からしめて、立派な芝居になつたので、人格者は何もいはず、爲さないでも、ただそこにゐるといふだけでも、力であり、救であり、教育でもあるのである。教場に誰が出るかといふことは、何を教へるかといふことよりも大切なことである。教場の空氣といふものは、出る先生によつてそれぞれ釀し出されるものであつて、同じ生徒が一時間毎に違つた人間になるのは、その教へる人の人格が生徒を包んで、それを感化するからである。

これは教室のことであるが、必ずしも教室に限らず、社會に於ても各〻その人の釀し出す空氣とい

ふものがあつて、その人に接觸してゐると、他の人とまた違つた感じが出るといふのは、その人格の奇しき働によるのである。戰爭でも例へば海軍で東郷提督がゐてもらひさへすればよい、陸軍で乃木將軍がゐてもらひさへすればよいといふやうなことがあるので、ゐてもらふその事が人意を強くする。これが非常な强味であつて、軍中にはかういふ立派な人格の將軍が居られるといふことが、戰爭に於ても全體の士氣を振はしめるわけである。豐臣秀吉とかナポレオンとかいふ將軍は、兵の數は少くてもわが陣には秀吉あり、ナポレオンありといふことが、兵の士氣を强くして、寡を以て、衆を討つことも出來たのである。だから、人格者はただゐてもらつてもよいので、働いてもらはなくてもよいのである。今日でいへば、東郷元帥は麹町にただゐてもらひさへすればよかつたのである。それで、外國の軍艦が來れば、眞先に艦長や將校が東郷元帥に會つて、一目でも元帥を見、一言でも元帥から出た言葉を耳にすることを、日本に來る樂みにし、名譽にしてゐた。「死せる孔明、生ける仲達を走らす。」といふことがあるが、人格は生きてゐる時ばかりでなく、死んだ後までも隨分働くものである。

二

人と人との接觸といふものは、つまりこの人格と人格との太刀打であつて、互に迸り出す精神力の火花の散らし合ひである。これは獨り人間ばかりでなしに、動物に於てもやはりさうであつて、猫と鼠でいへば、猫に睨まれた鼠はもう體がすくんで動けない。あの敏活な鼠が一歩も動くことが出來ないで、猫に射すくめられるといふのは、つまり猫の人——格といつてはをかしいが、猫格が鼠の鼠格に勝つたのである。獅子は山羊を氣死せしめる。大の辨慶が牛若にあやまつたのも、やはりあの少年の牛若の人格に辨慶の人格が負けたのである。もうさうなつたら、後から薙刀を以て牛若を斬るわけにゆかないので、どんなに油斷したつて、何したつて、もう隙も何も問題ではない。開け放しであつても、辨慶の力を以て牛若をどうにも出來ないのである。人格の力は實に不思議なもので、一たびそれに歸服し、その感化を受けたならば、片一方の者は絶對にそれに參つてしまふことがある。山伏辨圓が親鸞上人を見付け次第、殺してやらうと思つて狙ふけれども、さて親鸞上人に逢つてみると、とても殺すことが出來ない。文覺上人が西行を見付け次第、頭を叩き割つてやらうと思つても、西行に逢ふといふと、文覺くらゐの者が、「とても西行に刄が立つものか。己が頭を叩き割られなかつたのが幸であつた。」といつて恐れ入るのであるが、つまり親鸞や西行をどんなに仇としてつけ狙つても、辨圓（後の明法房）や文覺の力を以てしては、どうすることも出來なかつたのである。

吉井信照といふ陸軍大尉が數年前馬來半島で猛獸狩をしたことがある。或時鐵砲を持つて田舍道を歩いてゐた。まだとても猛獸の出さうな所でない原野に、突然大きな虎が出て來た。虎にもいろいろあるが、一度人間の肉を味はつた所謂人喰ひ虎は、人を求めて出るのだから決して退却しない。普通の

虎なら人の姿を見たり聲を聞いたりすれば逃げるが、さういふ人喰ひ虎に對しては、殺されるか、殺すかの外はない。猛虎は六尺ばかりバウンドして追追と近づいて來る。とてもまだ猛獸の出さうもない所だつたから、不用意にも鐵砲に彈を込めてゐないし、また彈を込める隙もない。きつと自分は殺される、虎に喰はれると思つた時に、連れて行つた馬來の土人が突然後から帽子を右手に高く振り、口に回回教の呪文を唱へながら、吉井大尉の前に立ち塞がつて虎と直面した。さうすると、虎の方が逃げて行つたといふことであるが、この時に虎の精神力と強い信念を持つたところのこの馬來の土人の精神力とがぶつかつたので、つまり大虎が土人に負けたのである。精神力といふものはあるもので、對立した者の精神の强弱高下によつて勝つか負けるか、支配するか支配されるかが決まることが隨分あるのである。これが人間に、信念といふか信仰といふか、その大切な所以であつて、信念、信仰はその人以上の或るものに、その人をすることがあるのである。

教育といふものは、どうしてもこの人格の仕事であつて、教育の權威といふものは人格から來るものである。任命の辭令などによつて權威がつくとかなんとかいふものではないのであつて、教師の內部から射す人格の後光に打たれる、これが教育である。佐久間象山の所に、吉田松陰とか、いろいろな人が行くと象山の人格に打たれる。教育はつまり人格と人格の接觸であつて、精神的火花の散らし合ひである。

先般は皇太子殿下御降誕奉祝の音樂會が東京音樂學校にあつて、皇后陛下が行啓あらせられて、私も陪聽の榮を得たが、最初に演つたのが能の「小鍛冶」。これは三條宗近が勅命によつて刀を鍛へようといふ時に相手がない。勅命は畏いが刀を打つ相手がないので、御辭退しようとする。その時、稻荷大明神が童子の姿になつて、お請けをするやうに、その段になれば相手にきつと打つ者が出て來るからといつて消えてしまふ。そこで、覺悟をきめてお請けして、いよいよ刀を打つ段になると稻荷大明神が出て來て、小鍛冶の合槌となつて立派な刀を鍛へ上げる。これが小狐丸といはれるのである。小鍛冶の宗近と稻荷大明神との間に一つの熱鐵の棒を置いて、互に火花を散らして打ち合つてゐる。教育といふものはこの鐵を打つやうなもので、そこに精神力が籠つて、互の掛け合ひによつて名刀が鍛へ出されるのである。教育家に小鍛冶ほどの腕、覺悟がなく、稻荷さんを呼ぶだけの力がなければ、稻荷さんは見えはしないのである。稻荷さんは偶然に見えるのではないので、小鍛冶ならば行つてやらうといふことになるので、つまり小鍛冶が稻荷さんをお呼びしたのであるから、その刀の鍛へ方が實に壯烈、古今の見ものであつたらうと思ふ。能で見てさへ、實に胸の躍るやうな感じがしたのである。

人格は、前にもいつたやうに、到底言葉などで現はされるものでない。吉野の花を見て、「これはこれはとばかり花の吉野山。」ただこれはこれはといふ外ないので、人格の風景には言葉はない、言語道斷である。言葉の力といふものは大であるが、しかしその力には限りがある。吾吾には言葉では表は

せないものがある。言葉の及ばないものは、無言の人格がそこに出かけて見せつけるのである。

「我に近づくは火に近づくなり。」といふ語があるが、例へば、吉田松陰の松下村塾に行つて松陰に近づくのは、全く火に近づくのである。ギリシヤの神話には、メヂユサといふ女があつて、その髪は蛇であつて、彼女を一目見ると石になるといふ話があるが、教育家は見る子供を石にしてはいけない。教育家はメヂユサであつてはならない。我に近づくものは火に近づくのであつて、子供を燃えしめるところのものでなくてはならぬのである。

三

そこで問題は、ただ何を教へるかといふことでなしに、誰が何を教へるかといふことである。同じことをいつても、話す人によつて感じが違ふ。同一の内容を持つてゐても、あの人がいつたといふことが非常に力となるので、客觀的に見れば、どの人がいつたとて、内容が一つなら同じではないかといはれようが、決してさうでない。

二宮尊德翁の言行を書いた「二宮翁夜話」といふ書の中に、俗儒があつて、翁の愛護を受けて儒學を子弟に教へてゐた。一日近村に行つて大いに酒を飲んで、醉つて路傍に伏して醜態を極めた。一人の弟子の子供がこれを見て、明日から先生の所に行つて教を受けないといふ。そこで、その先生が尊德翁の所に來ていふには、「私の失態は申譯がないが、苟も私の教へるものは聖人の書である。私の失態のために聖人の書を捨てるといふ理窟はあるまい。どうか子供を說諭して、また明日から寄越して下さい。」と。さうすると、尊德翁はなんといはれたか。翁曰く、「君憤ること勿れ。我譬を以てこれを解せん。玆に米あり。飯に炊いて糞桶に入れんには、君これを食はんか。それもと清淨なる米飯に疑なし。ただ糞桶に入れしのみなり。しかるに、人これを食するものなし。これを食するはただ犬のみ。君が學文またこれに同じ。もと赫赫たる聖人の學なれども、君が糞桶の口より講說する故に、子弟聽かざるなり。その聽かざるを不理といふべけんや。」かういふことがいはれてある。つまり如何に聖人の道であつても、糞桶の口からは聽きたくない。客觀的同一の眞理であつても、いふ人によつて受けるか、受けぬかはあるのであつて、自分の感服しないあの人の話なら御免だといふのは當然であつて、それを不都合とはいへないのである。つまり人にあるので、學問に客觀的價値はあらうが、その學を傳へるところの人格如何によつて、それが生きたり死んだり、或は好きになつたり厭になつたりするものである。

世の中は理窟一方ではゆかないもので、感情といふものが餘程支配してゐる。例へば、政界に於ても長老といふものがあつて、長老には皆が服し、それからいつてもらはぬと運びが圓滿にゆかないとか、或は一族にしても長老があつて、親類一同がそれに服し、その人のいふことならなんでも聞くとか、

人間といふものはさういふものであつて、世の中は理窟さへよければ人が從ふといふものでない。誰がそれをいふかといふことによつて、從ひ或は反對するので、決して理窟一方でゆくものではない。

政治でもさうであるが、社會生活でもさうである。德のある人があつて、それには皆が服するのである。必ずしも雄辯でなくても、訥辯であつても、あの人がいふのだといふことで皆が服する。幡隨院長兵衞や清水次郎長は數百の荒くれ男を顎で使つて、一言にして自分の生命をさし出させるだけの信用と尊敬を博したのは、つまり長兵衞や次郎長に一種の德といふか、人格があつて人を支配したに違ない。教育家はさういふ點に於て、隨分これらの俠客に學ぶところがあつてよからうと思ふ。靜岡の東、清水市の南に梅陰寺といふ寺があるが、そこには今日なほ次郎長の墓、それから子分の大政、小政、仙右衞門等の墓が立つて居て塵も留めず、やはりその流を汲むところの者が、常に詣つてゐるものと見える。つまり世の中といふものは理窟だけではゆかない、どうしてもそこに感情が入るのである。茲に人物の必要があるのである。

よく新聞や雜誌に懸賞で標語を募集することがある。なかなか造語のうまい人があるもので、鹿爪らしいうまい言葉を造る人があるが、これはただ造るのであつて、言葉を造る人と言葉通り行ふ人とは必ずしも同一人でない。造語のうまい人は案外人間は成つて居らぬ、反對のやうなこともあるのである。

教育もどうかすると造語のマスターになつてしまふ。修身の教科書を前に擴げて、それに引いてある澤山の聖賢の言葉を說明して、それで修身の教授が濟んだやうに思つてゐる者もある。しかし本當にいへば、修身といものはなかなか教へ難いものである。修身を受持つといふことは餘程覺悟があつて、さうして生徒の尊敬するところの人格者でありたい。今日誰でも受持たれるといふことが、修身を重んじてゐるやうであつて、實際さうでない結果になりつつありはしないか。學校の先生が皆人格者で、生徒の心服する者であれば結構だけれども、必ずしもさうはゆかない。

四

それで私は、學校には生徒の心服景仰するところの先生が一人でも二人でもあればよいと思ふ。爆彈は三勇士でもよい。滿洲、上海に於て戰死した我が國の軍人は、悉くが爆彈勇士にあたるものである。それなら爆彈三勇士といはずに、爆彈千勇士といつたらどうか。それは千には及ばないので、三で十分なのである。三人で日本人の忠勇を代表してゐるので、千人はいらないのである。一つの學校の先生は悉く精神的爆彈の勇士であつて欲しいが、それが實際は望めなければ、せめて三人、二人、一人でも、學校の中心となつて生徒を感化するところの人がありたい。つまり學校は先生次第、特にその人格が大切といふことになるのである。

昔の塾だとか、今日の私學にしても、中江藤樹先生の藤樹書院、吉田松陰先生の松下村塾、或は慶應義塾の福澤先生、同志社の新島先生の如きは、これが塾や學校の中心となり、それによつて全國から笈を負うて學徒が集まつたのであつて、つまりさういふ人がゐるといふことで、塾や學校が生きてゐたのである。

イギリスの或貴族の夫人に非常なアブラハム・リンカーン贔屓があつた。イギリスに居つてどうしてリンカーン贔屓になつたか。それは小さい時にアメリカで、リンカーンが或ステーションに來てゐたものと見えて、恰度そこへ行き合せたので、父親の肩車に乘せられて、その小娘が人の頭の上から一目リンカーンを見た。それが生涯の印象となり、感化となつて、リンカーン贔屓になつたといふのであるが、とにかく人物といふものは見ておくべきものである。富士山を見ておくやうなものであつて、人間の富士山を見るのである。見るといふことは非常な學問である。人格の風景に接すること、これは自然の風景に接する以上に、精神的の或物を多く與へるのである。

これは現在の人についてであるが、過去の歴史或は傳記によつていろいろな人物を識り、それを理想とし、力としてゆくといふことも、修養上非常に大切なことである。今日生きてゐて、今日の人同志の關係に於ても、やはりそれはいへるのである。過去のものよりも、生きた人間が居ればなほよいので、時效のついた、ひからびたやうな人間を、如何にも現代には生きた人間がなささうに、過去のものを煤をはたいて引つ張り出さぬでもよい。今日さういふ生きた、肉の溫い、血の通つた人物が居ればそれに越したことはない。何も昔の人を引つ張り出して來る必要はないが、居らぬなら仕方がない、過去の人を求めるやうなことになる。

特に子供といふものは、鳥みたやうなもので、よく人間が判る。鳥は第六感を持つてゐるか知らぬが、人が手に石などを持つて歩くと直ぐ立つ。しかしどういふ氣持もなしにその傍を通れば、そこにゐたとて逃げない。子供も第六感といふか、一種の英雄眼を持つてゐて、人間をよく鑑別する。幼稚園の幼兒が非常になつく保姆となつかない保姆とがある。どんなに諂つたところで、にせものの保姆には決してなつかない。つまり子供は欺くべからざる者、僞るべからざる者であつて、その英雄眼に照らし出された時には、にせものかほんものかといふことは直ぐ分る。これは教育家でもやはりさうである。

大體、人格といふものはこんなものだと思ふ。書といふものは非常に人格に重きをおくものであつて、吾吾が山陽の書、或は乃木將軍の書を尊ぶのはその氣節忠節を尊んで、その書に及ぶのである。支那でいへば顔眞卿、柳公權、岳飛の如き、それである。かくの如き人の書を尊ぶのは、その忠節氣節の士であるが故である。張瑞圖の書はなかなかうまいが、節義の點に於てこれを病むものがあるから、心ある者はあまり迎へない。書はその巧拙よりも、誰が書いたかといふことが問題になるのであ

る。いかに能く書いてあるかといふことよりも、誰が書いたかといふことが先決問題である。どんなに能く字が書いてあつても、その人格が惡ければ床の間に掛けるわけにゆかない。支那の杭州に行くと、丁度湊川神社みたやうな岳飛の廟がある。あそこには秦檜といふ裏切者の石像があつて、廟に詣る者がこの秦檜の像に小便を引つ掛ける。それで、もし秦檜がいかに能筆であつても、誰もその書を床の間には掛けまいと思ふ。つまり人物はなほ書の如しであつて、吾吾が人物を品評する時には、なほ書を品評する如きものがある。

五

人格のことは大體そのくらゐにして、次に實行といふことに移らう。一體思想といふものは最後のものではないので、實行しなければ思想も價値がないのではないか。頭の中で何を考へてゐたとて、それが外に出なければ、少しも人に利害を及ぼすものではない。考といふのは、本來實行の方法を講することなのである。汽車がステーションに來て停つてゐる。これは外から腦に刺戟が來たやうなものである。轉轍手が汽車をどちらのレールに走らさうかと、レールを合せたり離したりする。その汽車の行くべき道を決めるといふことが、考へるといふことである。つまり考へるといふことは、本來實行の方法を研究するといふことで、まだ中途半端のもので、論理學の中名辭の如きものである。だから、考へただけでは吾吾は最後に到達したのではなく、それを實行して始めて値打があるのである。危險思想といふのは、それを實行すると危險だから、又實行性があるから危險思想なので、心の中で何を考へてゐたとて、遂にそれを外に實行しなければ、問題はおのづから別になるのである。

理論の價値といふものは、要するに實行の可能性の有無及びその價値といふことによつて決まると思ふ。ただ空想を弄してゐて實行に移さなければ、何を考へたとて、指一本を動かさぬのだから、毫も痛痒を感じないのである。

ところで、お說法には必ずしも實行が伴はぬ。或時或人が極樂に行つて見たら、何か小さいくらげみたやうなものが澤山あつた。何かと聞いたら、あれは唇だ。これらの人は生前に良いことを話したから、唇だけが極樂へ行つたのだといつたといふ。吾吾はただ唇だけ極樂へ行きたくない。吾吾の全部が、吾吾の魂が極樂へ行きたいのである。もし修身がお話だけであつたならば、吾吾の全部は、吾吾の魂は、一體どこへ行くのであらうか。

西洋の話に、或所に父親があつて、三人の息子を持つてゐた。その親は、家に傳はる貴い寶石入の指輪を一つ持つてゐたが、三人の子のどれにこれを與へてよいか決しかねてゐた。そこで、それと同じやうな指輪を二つ作らして、死ぬ前三人の子供に別別にこれを與へた。父が死んだ後に、三人の子供の誰の持つてゐる指輪が本當の指輪、寶石の指輪であるか分らない。しかしそれは誰のでもよい、

徳行の最も優れた者の持つてゐる指輪が、その光を放つたのだから、眞の指輪は自ら分つて來るといふのである。つまり寶石の眞贋といふものは、徳の有無によつて決定するのである。この話は、レッシングが採つて、その有名な劇「賢者ナタン」を作つたのであるが、實行といふものは、本當の寶石入の指輪みたやうなもので、理窟はどうであらうとも實行が大切なのである。議論で指輪の寶石の眞贋を決しようといふよりも實行で寶石を光らせる方がよいので、議論といふものはどうでもなる。つまり實行が目的なのである。見る人の心心に任せておいて、峯の月は同じやうに光つてゐるので、實行はその峯の月である。理窟が分つて決定するまでは、實行しないとならば、吾吾生涯なんにもしないで居らなければならないものが隨分ある。現に哲學史とか、倫理學史といふものがあるのは、ただ哲學や倫理學上の論爭の發展の經路を示すばかりでなく、その途中の學說で今日やはり捨て難いものがあつて、どちらがよいともいひ兼ねるものが歷史的にあるからであつて、これは全部いけないとか、あれは全部よいとかいふことならば、今日哲學の研究は殘されてはゐないであらう。それで理論とか、臆說とかの歷史が成立つので、最後の決定の出來てゐないものが澤山ある。何時まで哲學史の研究をしたところで、今日まで二十幾世紀間の哲學史が出來てゐても、今後三十世紀、四十世紀になつても、哲學史は續くものであると思ふ。理論が片付いてから實行しようと思つたならば、生涯かかつたところで實行する時は來ないものがある。否、子子孫孫實行出來ないものがあるかも知れない。それで、

さういふことはいはずに、孝行はするものである。田舍の或青年が、「どうも私は親に孝行をするといふことが分らぬ、何故に親に孝行をしなければならぬか。」といつた。すると一人の年とつた人が、「さうか、それではこれから一週間程、お前さんの父親が畑から鍬を擔いで歸られた時に、盥に水を入れて足を濯いであげなさい。」といつた。「それで孝行が分るものか、だが、マアやらう。」といふので、鍬を擔いで親が歸つて來ると盥に水を入れて足を濯ぐ。だが、孝行は何故しなければならぬか分らぬ。二日目にまた親が夕方畑から歸つて來る、盥に水を入れてその足を濯いであげるが、まだ孝行の譯が分らぬ。なんでも三日目であつたか、夕方父親が畑から歸つて來る、子が盥に水を入れてその足を濯いでふと上を見ると、父親の眼頭から涙がボロボロ出てゐる。それを見てその青年は、「分りました、分りました。孝行はしなければならぬものです。」といつた。それである。理窟より實行であつて、親の眼から涙が出るのを見て、禪に悟といふものがあるが、飜然として悟つたのである。理窟ではいへないでも、親には孝行をしなければならぬといふことが實行の方から本人に分つて來たのである。

六

明治の偉い教育家の一人、近藤眞琴先生の事である。攻玉社の卒業式の時に、皆の人が揃つて、校長の近藤眞琴先生が見えれば、直ぐに式が始まらうといふ時に、先生が見えない。暫らくすると横の

戸が開いて、人力車を引き込んだものがある。「先生、遅れたから車に乘つて來たな。」と思ふと、その車を挽いてゐる人が先生で、中からお母さんが出て來た。つまり今日の式に母を遇はせたいといふので、校長さんが車に母を乘せて、先生自ら挽いて來たのである。それだけで、「孝行をせよ。」といはなくても、孝行の理窟を學校で何時間說かうよりも、その直觀の瞬間の印象によつて、孝行はしなければならぬといふことを、强く敎へられたのである。

福澤先生の「福翁百話にも」、道德は耳より入らずして眼より入るといふことをいはれてゐるが――道德は聽くものでなくて、見るものである。その實行を見るのが何よりも强く人を感化するのである。英國の批評家、詩人マッシュー・アーノルドは、「我等の生活の四分の三は行爲である。」といひ、自らは一生實例を以て敎へた。つまり言說や訓諭よりも手本を示す方が一層强い感化を與へるのである。

その言說や訓諭も人による。人によつて隨分效くものである。「彼は權威ある者の如く語れり。」とはクリストの說法を聽いた者の感嘆の言葉である。日蓮の辻說法、吉田松陰の講說、これは皆言語であつても權威があつたので、抵抗すべからざる力を以て人に迫つたのである。言說よりもなほ力があるのは實行である。親が酒を飲んで道樂をして、子供に、酒を飲んではいけない、道樂をしてはいけないといつても、子供は聽くものでない。今日新聞記事を賑はしてゐるが、案外な家庭に案外な子供が出ることがある。――それは一寸見には案外であるが、實は因果覿面であつて、家庭の親が子供に手本を示してゐたのである。親が良い手本ならよいが、惡い手本を見せてゐる。――道樂したり、酒を飲んだり、外に圍ひ者をおいて、子供だけ良くなれといつても、それは出來ない相談で、效果はない。それは反面的の見本を示すのかも知れないが、「私のやうになつてはいけない。」と。

すべて物事といふものは、然るべき原因があつて、その結果として起るので、不思議でもなんでもない。また實行家といふものは必ずしも理論家ではない。理窟といふものはどうでも付くものであるが、實行は一つである。月は一つより外ないが、それが人によつていろいろに映るのである。例へば、赤化の學生を轉向せしめる一番有力な者は、その筋の專門家によれば、母であるといふ。警察の留置場に母が行つて、理窟はいはないで、母が涙を以て說くのが一番有效だといふ。母は理論家ではない、理窟を捏ねに警察に行くのではなく、愛で暖めに行くのである。私はさういふ意味に於て、理論で轉向させようといふことは、あまり效力がないのではないかと思ふ。知よりも情で行く。一寸の蟲にも五分の魂はあるのだから、向ふが理窟で來るなら此方も理窟で行く。人間には負けず嫌ひなところがあり、向ふがさういへば此方もかういへるではないかと、なかなか理論を以て理論を徹底的に負かすといふことは容易に出來ない。それは哲學や倫理學の歷史に於ても、前にも述べた通りである。よくさういふことをいふ人がある、理論なら理論で負かさうと。「言何ぞ容易なる。」で、私はそれよりも、實行を以て、情を以て行く方が有效だと思ふ。理窟を述べるよりも、涙を以て、愛を以て無言で迫る

のである。最も訥辯な雄辯を以て、母が子供に接した時に、一番有效な轉向が出來るのではないか。「水責、火責はこたへようが、情と義理とにひしがれては、このほねぼねもくだくる思ひ。」とは、阿古屋が琴責の時に述べた切ない言葉である。ソクラテスや王陽明は知行合一といふことを唱へた。實際これらの人人は、いふことと行ふこととが一つになつて居つたのである。王陽明は、「未だ知つて而して行はざる者あらず。知つて而して行はざるは、只是れ知らざるなり。」といひ、また「知は是れ行の始、行は是れ知の成なり。」「知は卽ち行たる所以なり、行はすんば之を知と謂ふに足らず。」といつてゐるが、またそれを實行したものである。またギリシヤの哲學者は哲學と生活とがぴつたり一つになつてゐたのであるが、今日は大體哲學を敎へる者も、その哲學が自分の身についてゐない。哲學は講義するものとなつてゐる。哲學の學說を紹介するものとなつてゐる。さうして、自分は何かといふと折衷說だといふ。折衷說といふものは、要するに昔からあまり權威のないものである。しかし學生は、何かとにかく先生自身のものを授かりたいのである。もし力のある、自分のものを與へてくれたならば、本當に學ぶ者も喜び、刺戟を受けるだらうと思ふ。學校の修身の時間でも、生徒を緊張せしめなければならぬ。退屈するとあくびが出る。あくびは、敎場では先生に對する皮肉な無言の批評であつて、無聲無煙の火藥で大砲を放つやうなものである。事實敎場で生徒にあくびをされるくらゐ、先生としては、つらいことはない。それで吾吾敎師は、いかに敎場で一時限の授業を緊張でつないで行けるか、あくびをさせずに、緊張の一時限を生徒に過ごさせるかといふことを、常に考へ努力しなければならぬ。それはお寺でもさうであつて、お寺へ行つて、說敎が始まると睡くなり出し、說敎が濟むとばつちりと眼があくといふことを、ジョナサン・スキフトは面白く書いてゐる。つまり修身を敎へる者は、聽く者に興味を起さしめないと、却つて效果を殺ぐこととなるのである。

七

實行家の典型的の人としては、二宮尊德翁を擧げることが出來る。「二宮翁夜話」の中に次のやうなことがいつてある。「秋の田の刈穗の庵のとまをあらみ我が衣手は露に濡れつつ。」――これは誰も知つてゐる天智天皇の御製で、百人一首の始に出てゐる。これを國文學者が解釋すれば、「我が衣手は」の「手」はどうだ、「つつ」のかかりはどうだといふやうなことを、ただ言葉だけのことをかれこれといふのだが、二宮先生は實行家だからさうは見ない。何故に、「秋の田の」の御製が百人一首の最初に出てゐるのか、實は思はざる御惠の深いことが言外に現はれてゐるのである。翁も地方を歩いて村落の荒廢した有樣を見て、實に、「我が衣手は露に濡れつつ。」の御製も思ひ合せて、自分も袖を絞つたことであるといつてゐる。今日我が國の有樣を見れば、政治界を見ても、生活の方面を見ても、何方を見ても、「我が衣手は露に濡れつつ。」である。歌はまた歌として研究する人もあらうが、實行家は歌の「つ

つ」や、「あらみ」の「み」を問題にしてはゐない。眼のつけどころが違ふのである。尊德翁はまたかういふことをいつてゐる。大道は水のやうなもので、よく世の中を霑ほして滯らざるものである。書物は水の凍つたやうなものであつて、氷のままでは世の中を潤澤することは出來ない。胸にある溫氣を以て、熱を以て、この氷を溶かして水にして、始めて用をなすものである。書物の註釋は、氷にぶら下つた氷柱みたやうなものである。今の學者は、氷學者、つまら學者が多い。役に立たぬ學者が多くて、熱のない、人を動かす力のない、實行力のない言葉の學者が多いといふこともいつてゐる。實際さういへば、今日も氷學者、つまら學者が可なりゐるやうである。

また小田原侯の領地が、天保七年に五穀が實のらず、住民が饑餓に陷つてゐる。その時に小田原評定をする。君侯は江戸に居られるのだが、藏開きといふことは、伺つた上でなければ出來ないといふ者があつた。その時に尊德翁がいふには、「使者の歸るまでには數日を要するから、多くの飢民はその間に死亡するであらう。今は理窟の水掛論をすべき時ではない。飯時が來たから、辨當を食べて後で評議しようとはなんのことだ。公議を後にして私を先にすることがあるか。この議決せずんば、たとひ夜に入るとも辨當は用ふること勿れ。私も斷食する、各〻方もまたかくの如くせよ。」と、その聲雷の如く、一座大いに驚き、且當然の理に感じ、卽刻倉を開いて飢民に與へた。當時徒步で江戸へ往復すれば、三日くらゐはかかる。評定する者は辨當を食べてやつて居ればよいが、瀕死の者はどうするか。君公の命を待たぬでも、非常の時は斷行してよいといふので、恐らく叱られたら腹を切る覺悟で倉を開けたのであらう。

ところが、今日の會議といふものはどうであるか。これを片付けるまで食を斷てとはいはないが、食を斷つくらゐの覺悟で以てやれば、今少し眞劍に物事が運ぶのではないか。今日は會議や調査が多過ぎると思ふ。言論の世の中となつて斷行がない、實行がこれに伴はない。徒らに駄辯を弄して、言行が一致しない。上に立つ者にも隨分それがあつて、大衆は何を以て率ゐられるか。一體會議といふものは、大勢の決議といふものは、當らずさはらずの折衷說で、平凡で、どうかすると船頭が多過ぎて、舟山へ登るやうなことになつてしまふ。アメリカは委員會の國であり、決議の國である。何かといへば、委員會を作つて皆で相談しようといふ。これが平凡な國の證據である。武士道といふものは赤誠を以て忠孝を勵み、道に殉ずるに言論を須ひず、義に勇往邁進するのを以て本領としたのである。今日は言論が多過ぎる。「君子は言に訥にして行に敏ならんことを欲す。」と、二千餘年前に孔子はいはれたが、今日の吾吾の守るべきことも、またそれでなければならぬと思ふのである。

——（昭和九年四月斯文會總會に於ける講演）——

昭和十一年十二月四日印刷
昭和十一年十二月八日發行

非賣品

著作者　下田次郎

東京市小石川區小日向水道町八十四番地
發行者　株式會社東京開成館
代表者　松本繁吉

東京市牛込區山吹町百九十八番地
印刷者　山本禎男

東京市小石川區小日向水道町八十四番地
發行所　株式會社東京開成館
電話　大塚(86)三一三一－三一三五
(振替貯金口座)　東京五三二二番

株式會社宗文社印刷所印刷

672
369

東京小石川
東京開成館
電話大塚(86)三一三一—三一三五
振替貯金口座　東京五三二二番

672
369